

65歳の若き言語学者の肖像

最近 J. V. ネウストブニーは、再び自分のことを単に「言語学者」と呼ぶようになった。オーストラリアに住んでいたときに、彼は「社会言語学者」とか、「コミュニケーション学者」と呼ばれることを好んだ。現在、彼はこれらのすべての領域が「言語学」だということを強調し、言語学者は数人の文法的近視眼者によるこのことばの横領に抗議すべきだということをかたりたいのであろう。

たしかに、ある意味では、彼は二重人格者である。アメリカの言語学者エーナー・ハウゲンが70年代に東京で言語計画について講演した際、この分野の傑出した理論家の一人としてネウストブニーの名前をあげた。ハウゲンはネウストブニーの日本言語学者としてのもう一面をあまり知らなかったのも、この名前がすでに日本の言語学者の間で広く知られていることに気が付かなかったのである。

ネウストブニーの関心は、音韻論から社会言語学へ、それから言語計画の理論へ、さらに日豪間コミュニケーション問題の研究へ移った。そして最終的に、問題解決の手段としての日本語教育にたどりついた。彼が現在執筆中のライフワークともいえる著作の中で彼は自分自身のすべての経験を要約し、「人間の問題としての言語」をテーマにしている。これは、言語学から文化や社会へ思い切って道からそれようとしている彼の最初の試みではない。もちろん、モナシュ大学での彼の行政上の仕事は、すでに言語学だけではなく、日本研究のすべてをカバーしていたが。

1 ブラハ時代

彼は1933年ブラハ生まれである。私は彼の考古学者の父と美しいチェコ語を話した母を知っていた。彼の一卵性双生児の兄はやはり考古学者で、姉は引退している。彼は自身の選択で古典高等学校に入学した。最初はイラスコボ高校、ついでクベリーク通り高校に通学した。ドイツ語、ラテン語、古典ギリシャ語などに優れ、のちにロシア語も熱心に習った。よく皮肉っぽく言ったものだが、彼の日本語や英語の発音のよさは、アドルフ・ヒトラーに幼少のころからドイツ語を学ばせられたお蔭だということ。古典高校のカリキュラムでも、それほど沢山の言語を教える時間はなかったので、英語は個人教授で習った。

彼のロマンチックな職業への希望は、年と共に変わり、高級船員、イエズス会の神父から、弁護士へと移っていった。彼が私に話した限りのことだが。しかも、どれ一つ実現しなかった。代わりに、カレル大学に入学し、極東言語文化部で日本語を学ぶことになった。昔の決心について言えば、水泳が下手なので、いずれにしても、高級船員にはなれないし、また、あらゆる宗教に対して寛大な態度をとるものの、自身は宗教的ではないし、法律家としては悲劇的な存在になったのであろう。

日本で、よく人々が外国人になぜ日本語を学ぶか、聞くことがある。ネウストブニーの答えは次のようである。まず、高校時代に東洋研究所のヒンディー語、ウルドゥー語の夜間コースに通っていたし、大学でもインド語を続けるつもりでいた。ところが1952年に彼が1年に入学した年には、インド語科は新入生を採用しなかった。代わりに中国語、朝鮮語、日本語その他いくつかのアジアの言語のうちから採ることを薦められた。その中で日本語を選んだ。なぜかという、スベン・ヘディンの旅行記の中で見た、京都の庭園の中に芸者がいる写真に強い印象を受けたからである。「ぼくはあのころ、とてもおおくで、日本語を選らんだのも、庭園のためで、ゲイシャのせいではない。」と彼は言う。私はこの話しの信憑性を決して信じないが、まー本当かもしれない。だが、彼のヒンディー語やウルドゥー語への関心は本物であったようで、ずっとインドに対する親近感をもってきた。

2 東洋研究所

ネウストブニーは1957年大学卒業の年の秋、東洋研究所の大学院生となった。彼は、研究所の雰囲気を楽しみ、幸福な時代だったという。そして、1960年から2年間の東京留学もとても幸福だったし、つづいて27年間のモナシユ大学での仕事、また最近の日本での仕事などもきわめて幸福な時期だったと、いつも付け加えている。東洋研究所では、個々の研究者が別の分野の専門家だったが、お互いを尊重していた。極端な専門化はなく、業績目録から明らかのように、日本文化のさまざまな面について幅広く研究していた。

しかしながら、彼は、言語に最大の努力を向けた。学部時代に彼はスカリチカ教授の弟子であった。スカリチカ教授は知名度が非常に高いとは言えないが、プラーク言語学派の最も啓蒙された知性の持ち主だった。スカリチカは彼の注目を言語の曖昧性の研究に向けた。その結果、ネウストブニーはこのテーマを日本語アクセントの音韻論に適用して研究を進めた。スカリチカ自身は、言語のすべての部分があいまいであるが、音韻論だけが例外だと信じていたのに。ネウストブニーは、この分野で多くの実験的研究を行なったが、彼の博士論文の一部が未発表のままになっているのは、残念なことである。

3 日本滞在という間奏曲

1960年にネウストプニーは戦後初めてチェコ人として文部省の奨学金を得た。形式的には、彼は東大文学部、国語国文学科に籍をおいていたが、実際は、言語学科の服部四郎教授のゼミで多くの時間を過ごした。

二つの講義がネウストプニーに強い影響を及ぼした。第一は時枝誠記先生の源氏物語の講義だった。時枝先生はほとんど毎回、「これは何だ、さっぱり分からない」というようなことをおっしゃったそうだ。ヨーロッパの古典日本文学の教授たちは、すべて分かっているようなことを言われたのである。その他の講義は、のちに国立国語研究所の所長になられた林大先生によるものだった。この講義は漢字の字形についてであって、一見些細に見えるような画の「とめ」または「はね」の人間文化における意味を論じていた。何とすばらしい、またあるときは非条理とも言える現象であったことだろう。この言語というものは。

日本において彼の言語の社会問題についての関心は膨れ上がった。プラハで学生生活を送っていたときに、すでにのちに社会言語学と言われるものに関心をもっていたのだが、日本の2年間の滞在は、決定的で、1962年にプラハに帰ると、社会言語学にフルに転向したと言える。

同時に、1962年始めに私たちは結婚した。のちに、「どうして日本人と結婚したの」と聞かれると、彼は「柿原黎子と結婚したが、彼女は日本人?」と言い返した。人間をカテゴリーに分ける彼の感覚はうすいので、もしエスノメソドロジストが彼を研究しようとする、戸惑うのではないだろうか。

4 プラハに帰る

プラハに帰ると、博士論文を書き上げようとしたが、多くの問題があり、途中であきらめようかと思ったこともある。同時に研究所内の同世代の研究者の間で、言語政策や言語の社会面についての研究グループを作った。その中でベトル・ジマだけがその後ずっとこのテーマで研究を続けている。私自身も仕事をする機会に恵まれた研究所の生活は刺激的であった。1964年にデル・ハイムズがプラハに立ち寄った。これが後々までネウストプニーの仕事にはかり知れない影響をもたらした。その後のネウストプニーの仕事は、ハイムズの「コミュニケーションの民族誌」をとり入れることであった。「世界のどの社会言語学者よりも徹底的に」と彼がいつている。

この時期にはネウストプニーの論文の多くはまだアクセントの音韻論についてであった。だが、同時に、言語問題処理の類型論を発展させていたが、これは彼がすでに師たちから独立していたテーマである。実に、師であるスカリチカから独立するのに、10年かかったのである。

5 再び日本で

1965年にある日本の学者との交換で、私たち2人が半年日本で過ごす機会を得た。その当時チェコの通貨は交換できなかったの、私たちはまずしく、ネウストブニーは毎日国立国語研究所からバスで帰るか、電車で帰るか、どちらが安い、考えねばならなかった。しかし、仕事は順調に進んだ。

日本滞在中に、在メルボルンのモナシュ大学のレジナルド・ド・ブレイ教授から、モナシュ大学日本語教授職に応募するように薦める手紙を受け取った。ネウストブニーは、その職に応募することにして、その地位を得た。ある意味で、モナシュ大学はまだ若く有名でもなかったネウストブニーに「ローン」を与えたとも言える。大学は彼に大学行政に関わり、研究業績も増やすことを期待した。そしてネウストブニーはこの二つの条件に応えたと思う。

そして、ネウストブニーがモナシュの職に就く前の半年間ブラハに帰り、私は日本に留まり、七月に、長女マリカが生まれた。長男ピーターが生まれたのは四年後のことである。

6 モナシュ大学

モナシュ大学の教授職に応募した時点でネウストブニーはその大学について何も知らなかった。彼は短期間そこにおいて英語を上達させ故国に帰ろうと思っていた。むろん、さまざまな理由でそうならなかった。ネウストブニーが強調していることは、彼は政治亡命者ではないということだ。1968年夏にブラハの春の運動が抑圧されてからオーストラリアに留まることを決意したのは事実である。但しこれは私たちの政治思想が、ブラハに居残った人々のそれより、権威者の考え方と相容れないということではなかった。多くの人々がブラハに住み、簡単に移民することはできないのだから、私たちだけが特別待遇を要求することができるだろうか。むしろ、以前から考えていたことだが、私たちのように国際結婚している家族にとっては、どちらも特に有利な立場にいるわけではないので、第3国に住む方が暮らしやすいことと、私個人はチェコ語より英語の方が使いやすいことなどであった。

次第にいくつかの事実が明らかになってきた。モナシュ大学は私たちが知っていた一流大学に相当するような大学であった。そしてネウストブニーが新しい学科を創設するという機会にははかり知れないものであった。

ネウストブニーは学科の責任者になり、私の観察と他の人々の判断によれば、彼はオーストラリアで（あるいは更に広い規模で）最もバランスの取れた日本研究科を育成する機会をもった。勿論、アメリカには良い経済条件により第一級の学者を引き抜く大学がある。これはオーストラリアが学問の中心地

から遠く離れていたという地理的条件と、経済的条件も悪くはないが、アメリカにはとても敵わないことから、モナシュ大学では不可能であった。

それにもかかわらず、日本研究科は躍進した。ネウストプニーが1993年にモナシュ大学を去る時に、日本研究科には言語学者だけではなく、社会学、科学史、文化史、経済学など、幅広い専門分野を代表する25人の専任教員がいた。日本語教育はとても強くて、日本や他の国々から専門家がモナシュのモデルを見学しにやってきた。もとモナシュ大学の教員だった人々が、いま、世界中に散らばり、ハーバード、ケンブリッジ、東大、その他一流大学で教えている。またネウストプニーの教え子たちは、オーストラリアだけでなく、日本では名古屋、千葉、早稲田などの大学でも活躍している。彼らは若く、仕事は順調に進んでいるし、本家のモナシュ大学は自然の変化を遂げながらも、力強く活動を続けている。

振り返ってみると、モナシュ大学はネウストプニーにとって成功であったし、この事は最初の日本関係の学者として1980年にオーストラリア人文科学アカデミー会員になったことでもうかがわれる。彼はモナシュ大学でよく仕事できるように協力してくれた関係者、同僚、もと学生の皆さんに感謝している。

7 日本に移る

1980年代になると、ネウストプニーは日本に移ることをまじめに考えるようになった。彼自身がこの動機について何と言おうと、決定的な要因は、彼の青春の国で快適に過ごせるし、皆が日本語を話している国なのである。彼はこの言語に心からの愛着をもっている。考えてみると、この言語は彼の研究対象であるばかりでなく、彼の家族や友人の言語である。

勿論、1993年に本拠を日本に移す前に、彼は合計4年ほど日本で過ごした。ただし、彼はあくまでもお客であり、積極的な参加者ではなかった。今は事情が全く異なる。彼は「アドバイザー」として行動することを好まなかったが、同時に外国人のお客という役割を果たすべきではないと感じていた。そこで、客員教授になるほうがずっと経済的に有利になったはずだが、その可能性を考慮に入れなかった。このようにして、20世紀の国立大学文学部において最初の外人正教授となった。彼は日本人の正規の学生に（留学生にではなく）、日本語応用言語学を（日本語そのものではなく）、勿論日本語で（英語ではなく）教授するようになった。

彼は、職業的なあらゆる面に参加したので、彼の大阪大学と千葉大学の在任中にはさまざまな出来事があった。いつか彼の5年半にわたる日本の国立大学での経験の中で目撃したことを分析して本を書くことを、私が望んでいる。彼は、本年4月から、東京郊外にある桜美林大学で専任教員となった。これは

小さい私立大学の大学院で、彼は言語習得、社会言語学、言語計画、異文化間コミュニケーションなどを教えている。彼はこの新しいチャレンジを楽しみにしているようだ。

8 研究上の業績

雑誌「言語」に掲載されたインタビューで、ネウストブニーは自分が芸術家であると言っている。ときどき演奏旅行に出かけるし、ブルー、ピンク、グリーンその他の色の時代を通った。

今までにした仕事は、この小冊子に見られる業績表から明らかであろう。彼の仕事中最良のものは何かとたずねたとき、彼は躊躇なく言語問題の理論だと答えた。この理論は、ビョルン・イエルヌッドの協力により「言語管理理論」と名づけられたが、もともと1973年に書かれた「言語問題理論の概要」に遡る。さらに、「言語計画のパラダイムに向けて」（1983）を通じて発展し、1980年代、90年代を通じて、さまざまな分野への応用が試みられた。日本語では、彼の名前を広めたのは、疑いなく「外国人とのコミュニケーション」であり、15万部発行され、いまだに増刷が続いている。

9 世界市民

ビロード革命の1989年以降、彼は何回かチェコスロバキアに帰国することを打診してみた。しかし、これらの打診は、積極的に受け入れられなかった。たとえ帰ったとしても、彼はチェコ人やヨーロッパ人には戻れなかったであろう。彼は多くの大陸に跨って生きてきた。この立場は固く、変えることは不可能である。日本を含むアジアの文化だけが彼にとって大切なのではなく、（彼は沈復の「浮生六記」でたびたび涙をこぼすが）、人間も社会もそうなのである。アフリカにも、アメリカにも多くの友人がいる。そして、毎年クリスマスメルボルンで過ごすことを楽しみにしている。メルボルンは彼に多くのものを与えてくれた。

最近の2週間で彼は3キロやせた。そして、もっとやせようと、固く決心している。現在4冊の著書の編集や著述を終わらせようとしている。65歳になったからと言って、どうしてこんな大騒ぎするんだろう？

BIBLIOGRAPHICAL SERIES
OF THE ORIENTAL INSTITUTE
ACADEMY OF SCIENCES
OF THE CZECH REPUBLIC

Volume 13

J. V. Neustupný

BIBLIOGRAPHY
1957 – 2000

Edited by
Dita Nymburská

Prague 2001